

令和 3 年 6 月 11 日現在

機関番号：47407

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2020

課題番号：16K17356

研究課題名(和文)在宅における終末期ケアとの連続性から捉えたグリーフケア

研究課題名(英文)Grief care for families of patients receiving end-of-life at home medical care

研究代表者

中里 和弘(Nakazato, Kazuhiro)

尚絅大学短期大学部・その他部局等・准教授

研究者番号：90644568

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文):在宅医療を受けた患者遺族を対象に質問紙調査を行い、医療者から終末期に受けた「意思決定支援、家族と患者間の思いの言語化の支援」、患者が亡くなった後に受けた「遺族訪問」が「死別後の心理的適応」に及ぼす影響を検討した。その結果、1)「意思決定支援」を受けることで、遺族は最期の生活が本人の希望に沿ったものであったと評価し、終末期の治療やケアの選択の後悔が低く、看取りの満足度が高い、2)「家族と患者間の思いの言語化の支援」を受けることが患者への思いの言語化に繋がり、死別後の悲嘆が低い、3)遺族訪問のスタッフの態度が肯定的であるほど、遺族の看取りの満足度と死別からの主観的回復度が高いことが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

在宅療養患者の遺族を対象とした量的データから、終末期または患者が亡くなった後に提供される「意思決定支援、家族と患者間の思いの言語化の支援、遺族訪問」が「死別後の家族の心理的適応」に繋がることを確認された。支援内容の評価項目を作成することで、医療者が支援内容を客観的に捉え、振り返る際の基礎資料を得ることができた。在宅医療において終末期の患者家族に支援を行う際には、上記の支援が死別後の家族にとって患者の最期の生活や看取りに対する肯定的評価、悲嘆の軽減に繋がりを理解し、終末期の家族ケアとグリーフケアの連続性の視点から、支援の在り方を検討することが有益である。

研究成果の概要(英文):This study aimed to examine the impact of support from medical professionals in end-of-life (EOL) care on families' psychological adaptation after patients' death. This support for families considers the care recipients' preferences and aids in communicating feelings to patients. Additionally, this study examined the impact of visiting the family after the patient's death on families' psychological adaptation to the death. The results showed the following: 1) Support from medical professionals who consider the care recipients' preferences was linked to families' satisfaction with EOL care and regret in treatment and care choices at EOL. 2) The support from medical professionals in communicating feelings to patients promoted verbalization of feelings from families to patients, leading to lower grief. 3) The more positive the attitude of the staff who visited the bereaved family, the higher the family's satisfaction with EOL care and the emotional recovery from grief.

研究分野：心理学

キーワード：グリーフケア 終末期ケア 家族ケア 在宅 遺族

1. 研究開始当初の背景

多死社会となる我が国では今後さらに、在宅で死亡する患者及びその患者を看取る家族の増加が予想される。そのため在宅医療に携わる医療者には、患者が死亡した後の家族(遺族)に適切な支援(グリーフケア)を提供することに加え、終末期ケアにおいても死別後の家族の心理的適応に繋がる家族支援の視点が求められる。

ただし、在宅における終末期の家族支援と死別後の患者家族の心理的適応との関連を検討した研究は極めて少ない現状にある。そこで本研究助成事業では、まず終末期ケアにおいて家族になされる支援として、「家族が患者本人の意思を尊重した治療やケアの選択に関与できる支援(以下、「意思決定支援」と略)」、「家族と患者間の思いの言語化の支援」に焦点を当てる。在宅において終末期の医療とケアを選択する過程では、患者本人にとっての最善のケアを前提とする。そのため医療者が終末期の意思決定に関わる家族と対して、患者本人の意思を尊重した治療やケアの選択に関与できるように支援することが重要となる。そしてそのような支援を行うことで本人の希望に沿った最期の生活に繋がると同時に、遺族の看取りの満足度を高め、終末期の治療やケアの選択に対する後悔が少なくなるものと推測する。

次に、家族と患者間の思いの言語化の支援では、終末期に相手に伝えたい思いを伝えることは患者の QOL に関連すると同時に、家族にとっても死別後の心の安らぎとなると指摘されている。しかし、終末期に患者と家族間で思いを言葉にすることは必ずしも容易ではない。そのため、患者と家族で相手に伝えたい思いを医療者が橋渡しをしたりして、両者の思いの共有を支える場合がある。また患者家族に対して患者にどのように思いを伝えられた良さを提案したり、最後まで患者の聴覚機能が維持されていることを保証し、家族から患者への思いの言語化を後押しすることがある。ただし、在宅医療においてこのような家族支援が家族から患者への実際の思いの言語化に繋がるのか、また思いを言葉にすることが死別後の悲嘆にどのような影響を及ぼしうるのかについては明らかにされていない。在宅における終末期ケアにおいて、医療者が患者家族に対して「意思決定支援」や「家族と患者間の思いの言語化の支援」を行うことが、死別後の家族に及ぼす影響を量的に検討することは、終末期の家族ケアとして配慮すべき重要な要素であるかどうかについて議論する上で欠かせない。

そして終末期の家族ケアは、患者が死亡して患者宅を離れることで終了する。しかしながら在宅医療でのグリーフケアでは、患者が亡くなった後に時間を置いて患者家族のもとを訪れる遺族訪問がなされ、その実施率の高さからも遺族訪問は在宅医療のグリーフケアの要といえる。しかしながら遺族訪問に関しては、その内容の実践報告や実態調査がなされているものの、遺族訪問を受けた遺族が事業所の訪問した事業所スタッフをどのように評価したのか、また遺族訪問をすることが遺族の心理的適応に繋がっているのかまでは十分に検討されていない。そのため、遺族訪問が遺族の看取りの満足度や悲嘆軽減に寄与するかどうかを明らかにすることは、遺族訪問の必要性を担保する根拠となる。さらに遺族訪問のスタッフの対応を量的に評価することは、その支援の質を検討する上で有益な資料となる。

2. 研究の目的

本研究助成事業では、支援の受け手である患者家族(遺族)の視点を基に、医療者から受けた「患者の終末期及び患者が亡くなった後に受けた支援」が「死別後の心理的適応」に及ぼす影響を明らかにする。そのため本研究助成事業では3つの研究を実施し、次の2点を検討した。

1) 医療者から終末期に受けた「意思決定支援、家族と患者間の思いの言語化の支援」を評価する項目を作成する。そして「医療者から終末期に受けた支援」と「死別後の心理的適応(看取りの満足度、終末期の治療やケアの選択に対する後悔、複雑性悲嘆)」との関連性を検討する。

2) 医療者から患者が亡くなった後に受けた「遺族訪問」に関して訪問スタッフの対応を評価する項目を作成する。そして「遺族訪問時のスタッフの対応」と「死別後の心理的適応(看取りの満足度、死別からの回復度、複雑性悲嘆)」との関連性を検討する。

3. 研究の方法

方法及び対象者、主な調査内容

研究1

2015年4月~2016年3月の間に、関東の訪問看護事業所から在宅訪問看護サービスを受けて自宅または病院で死亡した者の遺族753名を対象に、事業所を経由して、質問紙調査を実施した。調査実施期間は2016年10月であった。349名から回答を得られ、そのうち患者本人の年齢が65歳以上であった320名の中で、回答に欠損のなかった計237名を分析対象とした。故人との続柄は、配偶者106名、実親105名、義親22名、その他4名であった。

主な調査内容は、終末期に医療者から受けた意思決定支援(3項目;意思推定支援、本人にとって最善の選択をするための話し合い、家族の選択の肯定)、本人の希望に沿った最期の生活の実現、看取りの満足度、終末期における家族から患者への思いの言語化の有無、終末期の家族と患者間の言語化に対する医療者の支援(8項目:家族が患者に伝えたい思いの傾聴、家族から患者への言語化の勧め、患者の聴覚機能保持の保証等)、患者本人の属性、遺族の属性であった。

研究2

中部圏にある1寺院に属する門徒362名(成人)を対象に質問紙調査を実施した。調査期間は2018年11月~12月であった。251名から回答が得られ、死別経験のある215名を分析対象とした。故人との続柄は、配偶者25名、実親142名、義親33名、きょうだい15名であった。

主な調査内容は、終末期に医療者から受けた意思決定支援(3項目;研究1で作成した項目を使用)、看取りの満足度、終末期の治療やケアの選択に対する後悔であった。

研究3

在宅訪問看護を利用していた親(実親・義親)を在宅で看取ってから半年~2年経つ成人600人を対象に、2回のインターネット調査を実施した。1回目の調査を2020年6月、2回目の調査を2021年12月に実施した。本研究では、2回目の調査に回答が得られた計469名(実親341名;義親128名)を分析対象とした。

主な調査内容は、終末期の家族と患者間の言語化に対する医療者の支援(8項目:研究1で作成した項目を修正)、遺族訪問時のスタッフの対応の評価(7項目:思いの傾聴、介護の労のねぎらう言葉かけ、訪問時の出来事や故人の思い出の共有等)、看取りに対する満足度、死別からの主観的な回復度、複雑性悲嘆、患者本人の属性、遺族の属性であった。

倫理的配慮

研究1及び研究2の質問紙調査では、調査依頼書において回答者への倫理的配慮(調査趣旨、調査票の配布手続き、分析処理の仕方、データ使用の範囲、回答が自由意志であることを)を記載し、書面での調査協力を求めた。調査票の配布及び対象者の個人情報の管理は調査協力機関が行った(研究1では事業所、研究2では寺院)。研究3のインターネット調査では、調査の説明画面において、回答者への倫理的配慮(調査の内容、データ使用の範囲、回答が自由意志であること、回答はインターネット調査会社の個人情報保護方針に基づき取り扱うこと)を記載した上で、回答協力に同意した者のみに調査項目を提示した。全ての調査において、研究者が所属する機関の倫理委員会の承認を得た上で調査を実施した。

4. 研究成果

研究1

1) 終末期に医療者から受けた「意思決定支援」と「看取りの満足度」との関連性
パス解析、媒介分析を行った結果、医療者からの「意思決定支援」が「本人の希望に沿った最期の生活の実現」を媒介し、「看取りの満足度」に関連していた。よって家族が医療者から終末期に本人の意思を尊重した意思決定の支援を受けることで、最期の生活は患者本人の希望に沿ったものであったと評価され、その結果として看取りの満足度が高いことが示唆された。医療者が終末期の意思決定に関わる家族に接する際には、本人の意向を軸に働きかける意思決定支援が重要といえる。

2) 終末期における家族から患者への思いの言語化と医療者の支援との関連
二項ロジスティック回帰分析を行った結果、「終末期の家族から患者への思いの言語化があり」に対して、「終末期の家族と患者間の言語化に対する医療者の支援あり」で有意な関連性が認められた。よって医療者が終末期の患者家族に対して患者への思いの言語化を支援することが、家族が患者に思いを言葉にする行動に繋がる可能性が示唆された。

研究2

パス解析を行った結果、医療者から受けた「意思決定支援」が「本人の希望に沿った最期の生活の実現」を媒介し、「看取りの満足度」及び「終末期の治療やケアの選択に対する後悔」に関連していた。よって家族が医療者から終末期に本人の意思を尊重した意思決定の支援を受けることで、最期の生活は患者本人の希望に沿ったものであったと評価され、その結果として看取りの満足度が高く、終末期の治療やケアの選択に対する後悔が低いことが示唆された。

医療者が終末期に患者家族に対して本人の希望や意思に沿った意思決定を支援することは、患者本人の希望に沿った最期の生活の実現のためだけでなく、死別後の家族の後悔の軽減に繋がる可能性がある点において、終末期の家族ケアとしても重要な要素といえる。

研究3

1) 終末期における家族から患者への思いの言語化と死別後の複雑性悲嘆との関連
二項ロジスティック回帰分析を行った結果、「終末期において家族から患者に思いの言語化あり」に対して、「終末期の家族と患者間の言語化に対する医療者の支援が多い」で有意な関連性が認められた。医療者の「患者と患者間の思いの言語化の支援」が家族の思いの言語化に繋がる可能性があり、研究1の研究結果を支持する結果が得られた。またパス解析を行った結果、「終末期において家族から患者への思いの言語化があり」が「1回目調査時の複雑性悲嘆」を媒介し、「2回目調査時の複雑性悲嘆」に関連していた。終末期に家族が患者に思いを言葉にすることが死別後の複雑性悲嘆の軽減に繋がる可能性が示唆された。

2) 「遺族訪問時のスタッフの対応」と「看取りの満足度」及び「死別からの回復度」との関連
訪問看護事業者のスタッフから遺族訪問があった者を対象に重回帰分析を行った結果、遺族訪問時のスタッフの対応が良かったほど、2回目調査時の看取りに対する満足度が高く、死別から

の回復度が高かった。遺族訪問時に訪問スタッフが適切な対応を取ることが遺族の心理的適応に繋がる可能性が示唆された。

研究のまとめ

研究1~3で関連性が認めれた要因間の関係を整理したものを図1に示す。まず、本研究助成事業では、在宅医療において終末期の患者の家族に行うケアとして、「意思決定支援」と「家族と患者間の思いの言語化の支援」に焦点を当てた。

在宅の終末期の医療やケアが患者本人にとっての最善のケアであるためには、医療者が終末期の意思決定に関わる家族に対して、患者本人の意思を尊重した治療やケアの選択に関与できるように支援する必要がある。そして本研究では、患者家族が医療者から終末期に意思決定支援を受けることで、遺族は患者の生活は本人の希望に沿った生活であったと評価し、それにより終末期ケアの選択の後悔が低く、看取りの満足度が高くなると考えられる。終末期に患者家族が本人の意思を尊重した治療やケアの選択に関与できる支援(本人の意思を推定すること、本人にとって最善の選択をするための話し合いを行うこと、家族の選択の肯定すること)は、死別後の家族の心理的適応に繋がる点において、終末期の家族ケアとしても求められる内容といえる。

そして本研究では「家族と患者間の思いの言語化の支援」が、終末期における家族から患者からの思いの言語化を促し、それにより死別後の悲嘆の軽減に繋がる可能性が示唆された。終末期に家族と患者が相手に思いを伝えることは難しいケースもあり、その場合には医療者が必要に応じて支援をすることが家族になって有益になると考える。

さらに本研究では、医療者から患者が亡くなった後に受けた支援として「遺族訪問」を取り上げ、「遺族訪問時のスタッフの対応」と「遺族の心理的適応」との関連性を量的に検討することができた。本研究では、遺族訪問のスタッフの態度を評価する7項目を作成し、項目の合計得点が高い(肯定的評価)であるほど、遺族の看取りの満足度及び死別からの主観的回復度が高かった。よって訪問スタッフが適切な対応をすることで遺族訪問は、遺族の心理的適応に繋がるグリーフケアの役割を果たすといえる。

また研究を実施するにあたり、「意思決定支援」、「家族と患者間の思いの言語化の支援」、「遺族訪問時のスタッフの対応」を量的に評価する項目を作成することができた。各支援の評価を数量的に捉えることで、医療者が支援の有無やその効果を客観的に捉え、対応を振り返る際の基礎資料となるといえる。

以上のように、本研究助成事業では、支援の受け手側の視点から、在宅療養患者の家族に対して行う終末期の「意思決定支援」、「家族と患者間の思いの言語化の支援」、そして死別後の「遺族訪問」の影響を確認した。今回の質問紙研究は要素ごとに関連性を検討したものであり、今後は検討内容を統合した前向き研究を行い、支援効果を実証することが求められる。

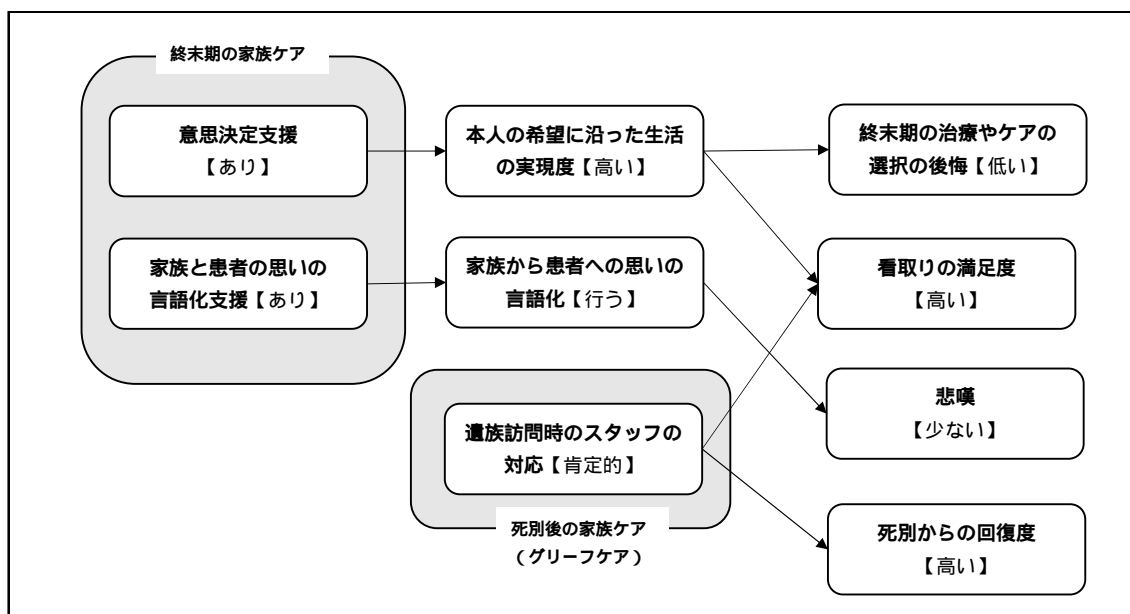


図1. 研究結果の整理図

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Nakazato Kazuhiro, Wakui Tomoko, Hirayama Ryo, Shimada Chiho	4. 巻 55
2. 論文標題 Factors related to parent-child communication about end-of-life care -A survey of adult children with an elderly parent-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Nippon Ronen Igakkai Zasshi. Japanese Journal of Geriatrics	6. 最初と最後の頁 378 ~ 385
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3143/geriatrics.55.378	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 中里和弘	4. 巻 24(510)
2. 論文標題 認知症の人と家族にとっての治療とケア; 闘病や介護を伴う死別を経験した遺族の語りを理解するために	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 看護のチカラ	6. 最初と最後の頁 28-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Nakazato Kazuhiro, Shiozaki Mariko, Hirai Kei, Morita Tatsuya, Tatara Ryuhei, Ichihara Kaori, Sato Shinichi, Simizu Megumi, Tsuneto Satoru, Shima Yasuo, Miyasita Mitsunori	4. 巻 27
2. 論文標題 Verbal communication of families with cancer patients at end of life: A questionnaire survey with bereaved family members	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Psycho-Oncology	6. 最初と最後の頁 155 ~ 162
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1002/pon.4482	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 中里和弘	4. 巻 22(476)
2. 論文標題 身体・認知機能が低下した人とその家族に看護師ができること; 在宅からの終末期の認知症患者の受け入れと家族対応.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 看護のチカラ	6. 最初と最後の頁 54-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中里和弘	4. 巻 22(483)
2. 論文標題 身体・認知機能が低下した人とその家族に看護師ができること；在宅からつながった患者の看取りを次に活かす情報共有とデスカンファレンスの意義	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 看護のチカラ	6. 最初と最後の頁 46-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中里和弘	4. 巻 21(452)
2. 論文標題 変わりゆく介護の姿-第4回看取った後の家族（遺族）への理解	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 看護のチカラ	6. 最初と最後の頁 76-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河村諒、中里和弘	4. 巻 24
2. 論文標題 近親者と死別した高齢者の悲嘆に関連する死生観についての検討	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 ホスピスケアと在宅ケア	6. 最初と最後の頁 24-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中里和弘	4. 巻 21(463)
2. 論文標題 変わりゆく介護の姿-第10回 終末期の高齢患者と家族の心理	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 看護のチカラ	6. 最初と最後の頁 80-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 中里和弘、島田千穂、平山亮、杉山美香、伊東美緒、菊地和則、粟田主一
2. 発表標題 人生の最期を考えるワークショップによる終末期準備行動の変化
3. 学会等名 第1回日本在宅医療連合学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中里和弘、島田千穂、涌井智子、児玉寛子
2. 発表標題 「終末期に医療者から受けた代理意思決定支援」と「看取りの満足度」との関連 - 遺族調査からの検討 -
3. 学会等名 第20回日本在宅医学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nakazato K, Shimada C, Wakui T, Kodama H
2. 発表標題 The families' verbalizing of gratitude and apology to patients at end of life - a questionnaire survey with bereaved family members
3. 学会等名 International Conference on Communication in Healthcare 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中里和弘・島田千穂・涌井智子・児玉寛子
2. 発表標題 在宅療養高齢者を看取った家族の介護と看取りに対する感情と精神的健康との関連
3. 学会等名 第2回エンドオブライフケア学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nakazato, K., Hirayama, R., Wakui, T., Shimada, C.
2. 発表標題 The Relational Nature of Children's Perceptions of Parental Aging: Findings from a Japanese Sample.
3. 学会等名 The 21st IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中里和弘、島田千穂、舞鶴史絵、水雲京、佐藤眞一
2. 発表標題 在宅の看取りケアにおける意思反映が家族の適応に及ぼす影響
3. 学会等名 第59回日本老年社会科学学会大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中里和弘、島田千穂、片山史絵、水雲京、佐藤眞一
2. 発表標題 支援者から見た遺族訪問の実態と意義
3. 学会等名 第19回日本在宅医学会大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中里和弘
2. 発表標題 終末期がん患者の「スピリチュアルペインのアセスメントとケア」の現状と展望
3. 学会等名 第81回日本心理学会大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 中里和弘、舞鶴史絵、鈴木真智子、佐藤真一	4. 発行年 2019年
2. 出版社 武庫川女子大学出版会	5. 総ページ数 65-91
3. 書名 在宅療養がん患者と家族に対する心理的支援とその意義. 福尾恵介(編)がん患者の栄養管理のポイント - 基本知識と症例から学ぶ - .	

1. 著者名 中里和弘	4. 発行年 2017年
2. 出版社 インターメディカ	5. 総ページ数 170-191
3. 書名 長期にわたるケアの末の家族の立場 (Chapter6-Section2). 遺族・スタッフのためのグリーフケア (Section3). 井藤英喜監修 伊藤美緒・木村陽子編 認知症の人の「想い」からつくるケア 急性期病院編 .	

1. 著者名 中里和弘	4. 発行年 2017年
2. 出版社 星和書店	5. 総ページ数 401-406
3. 書名 第6章 その他の問題-5. 死別反応. 精神科治療学編集委員会編 高齢者のための精神科医療 (精神科治療学第32巻増刊号)	

1. 著者名 中里和弘	4. 発行年 2021年
2. 出版社 全国社会福祉協議会	5. 総ページ数 382-384
3. 書名 第2部保健医療サービス 第8章 保健医療における支援の実際 (多職種連携を含む). 第3節 「在宅医療における支援」. 「社会福祉社会福祉学習双書」編集委員会 社会福祉学習双書2021 第14巻「医学一般 医学概論 / 保健医療と福祉」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------